

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	模擬患者 (Simulated Patient: SP) 参加型シミュレーション教育の学修方略の検討				
研究組織	代表者	所属・職名	短期大学部 歯科衛生学科・准教授	氏名	長谷 由紀子
	研究分担者	所属・職名	短期大学部 歯科衛生学科・教授	氏名	仲井 雪絵
		所属・職名	日本医学教育学会 学会国際化委員会・委員	氏名	吉田 登志子
		所属・職名	岡山 SP 研究会・代表	氏名	前田 純子
		所属・職名	岐阜大学医学教育開発研究センター・講師	氏名	今福 輪太郎
発表者	所属・職名	短期大学部 歯科衛生学科・准教授	氏名	長谷 由紀子	

講演題目	Competence 獲得を促進する模擬患者 (Simulated Patient: SP) 参加型シミュレーション教育
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>【背景と目的】患者-医療者間および医療チームの人間関係を基盤とする医療において、コミュニケーション能力の向上は不可欠である。臨床経験の無い学生が学生自身で患者の多様な背景や価値観への理解を深めたり、自身のコミュニケーションを客観的に捉えたりすることは容易ではない。本研究は、医療現場の臨場感を高め対話による振り返りが可能となる模擬患者 (Simulated Patient: SP) 参加型シミュレーション教育を歯科衛生学科学生対象の教育に導入し、その学修効果を検証することを目的とした。</p> <p>【方法と結果】2021年度歯科衛生学科2年生を対象に、連続した3限(90分×3)で講義と演習を組み合わせたSP参加型シミュレーション教育を導入した。具体的には、医療コミュニケーションの意義および技法に関する講義と、SPと、あるいは学生同士で初診時の医療面接のロールプレイと振り返りセッションで構成される演習を実施した。演習は6~7人のグループで6回(今年度はSPとのロールプレイを増やし6回中2回)行い、学生は、歯科衛生士役、患者役、観察者役の役割を各1回以上担うこととした。講義および振り返りセッション終了後に学生が記載した振り返り記録の記載内容を、本授業からの学生の学びという観点から質的に分析した。学生は、講義・演習より言葉や表現、態度によって患者の捉え方や抱く感情が異なり、エラーの無い意思疎通にはコミュニケーション技法の活用や工夫が必要であると理解した。そして、それが患者の安心感や納得そして医療実践の有用な情報収集へ繋がると認識した。また、ロールプレイで共感の表現や情報収集を試みたが、臨床の知識・経験不足も相まって医療面接を上手く実践することができなかった。しかし、SPや学生同士の客観的フィードバックを得ることで、自らの強みに対する肯定感を高め、弱みに対する課題の明確化をすることができた。また、マニュアルや見本通りではなく、目の前の患者に向き合った対話、感情の受け止めと支援により信頼関係が構築され、意味のある医療面接が行えると考察した。さらに、学生は既習のコミュニケーションや総論的医療面接の知識(Knows)はあると自負していたが、今回の講義・演習を受け、どのように実践すべきかを知っていること(Knows How)だけでなく、それを実際にやってみせること(Shows How)に対する難しさを感じ、今後の臨床実践(Does)を見据えた課題を設定し学習意欲を高めていた(Miller, 1990)。今回SPとのロールプレイを増やしたことで、学生同士のロールプレイとは違う臨場感や緊張感を感じ、医療面接の意義や自らの強み弱みに対する深いメタ認知的考察ができており、歯科衛生士教育におけるSP参加型シミュレーション教育の有用性が示唆された。</p> <p>【今後の展望】学生の得た知識(Knows)を臨床実習で活用できる(Does)レベルに能力を向上させるため、今回のようなシミュレーション教育とフィードバック、実践の省察を継続的に実施していくことが重要である。今後は、学生が自信を持って臨床実習に臨めるよう、competenceを確実に修得する質の高い教育実践を目指したい。</p>